平成１５年９月１日発行

# かまぼこ

第９号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

## わがまちの顔

### 子ども達と菊作り　小出　精志さん

いつの頃からか毎年十一月、熊野神社の七五三祝いの日に、菊の鉢を境内に並べ、お参りに来た人々に花を見て頂くようになりました。菊薫な秋、菊の花を観賞して喜んで頂ければこれに越したことはありません。

ある年、小学校の子ども達が菊作りをするので手伝って欲しいと言われ、子ども達と菊を育てる作業をするようになりました。子ども達は、夏休み中も水やりを続け、秋には花を咲かせることができました。そして十一月、七五三の日に子ども達が育てた菊の花を熊野神社の境内に並べ、参詣の人々に見て頂きました。いや参詣の人以上に、菊を作った子ども達の両親、祖父母、さらには親戚の人まで菊の花を見に来て頂き、境内は華やいだ雰囲気に包まれました。

子ども達は一生懸命、菊の世話をして花を咲かせることができ、育てる喜びを感じ取ってくれたのではないかと思います。

また、家族の方が子どもの満足した笑顔と菊の花を写真に収めている姿がとても印象的でした。

一昨年、矢口小学校から「今年は矢口小学校創立百十周年になるため、子ども達が百十鉢の菊の鉢を育てて、十一月に行う周年行事に飾りたいので指導をして欲しい。」という依頼を受けました。菊作りの会員二人と私が、学校に行き子ども達と菊作りを始めました。鉢は一年生の時、あさがおを育てたものを使い、材料はできるだけ学校にあるものを利用するようにしました。菊苗の植付け、水やり、施肥、支柱立て、わき芽取りなど、菊の成長の節々に学校へ行き、子ども達と作業を続けました。ある時は、子ども達と給食を一緒に食べながら、菊の世話について話をし、すっかり子ども達と仲良くなり、子ども達から「菊作り名人」と呼ばれるようになりました。

そして十一月、菊は立派に開花し、学校中を菊の花で飾り、百十周年記念日を迎えることができました。「こんなに大きい花が咲くとは思わなかった。」と子どもは作文に書いていました。

私は二十年以上前から趣味の一つとして菊作りを続けていますが、子ども達と菊作りをする時の充実感は又格別なものがありました。長い期間、菊の世話をして、大きく咲いた花を大事そうに見ている子ども達の顔は輝いているように見えました。

この菊作りの体験から、子ども達は多くのことを学び取ってくれたのではないかと思っています。これからもゲストティーチャーとして、子ども達と触れ合う時間を大切にしたいと思っているところです。

（取材　瀬川・山崎委員）

子ども達を指導する小出さん

# 蒲田・キネマの面影

## 流行は蒲田から

そのルーツは、大正九年にオープンした「松竹キネマ撮影所」です。

都心に近く、交通の便もよいうえに多摩川や東京湾、池上本門寺などロケーションの適地にも恵まれ、しかも地価が安かったこともあり、この土地が選ばれたそうです。蛙の鳴いていた蒲田田んぼが近代感覚の先端に躍る、東洋のハリウッドに変身を遂げることになりました。

庶民生活の機微をきめ細やかに描いた作風は「蒲田調」と呼ばれ大きな話題となりました。「流行は蒲田から」と言われるようになり、当時発行されていた映画雑誌にも「あこがれの蒲田」ということばが見られるほど、蒲田は流行の発信地でした。

## 蒲田撮影所

関西・関東の演劇界に君臨していた松竹が、新しい映画に着目し、社長大谷竹次郎は、大正九年二月初めて映画製作事業を世間に発表、ただちにアメリカ映画界見学のために幹部職員を派遣し、カメラマンのヘンリー小谷ほか二名の技師をスカウトして帰ってきました。それまでの日本映画界は日活と天活に二分され、両者は旧態依然たる活動写真的なものしか作ることが出来ず、松竹は欧米から学んだ劇映画の制作に重点を置き、日本映画の向上を目指しました。

建設敷地として、井の頭、鶴見、大宮などが候補に上がりましたが、最後には蒲田が有力視され東京府下荏原郡蒲田村字新宿、中村化学研究所の敷地九千坪を買い入れ、「松竹キネマ蒲田撮影所」を誕生させました。当時の撮影所近辺は梨畑、桃畑が並び、始めは古びたレンガ造りの事務所と、ところどころの空き地にテント張りのオープンステージがあるのみで、急遽、木造ガラス張りの大ステージが建設されました。

また、その年の四月にはキネマ俳優学校を設け、募集選抜をした三十六人の生徒を養成し、この研究生から後の島津保次郎をはじめ、村田実、牛原虚彦などの一流監督を生み、英百合子、沢村春子、東栄子、鈴木伝明などのスターが誕生しました。

蒲田撮影所の記念すべき第一回作品は、ヘンリー小谷撮影ならびに監督、川田芳子、中村鶴蔵主演の時代劇「島の女」三巻で、大正九年十一月一日、東京歌舞伎座で封切られました。また、松竹キネマが始めて世に問うた意欲作は翻訳物で、村田実監督「路上の霊魂」、軽井沢に大掛かりなロケーションを敢行しました。この映画に東郷是也という青年が出演しましたが、これが後の大スター鈴木伝明でした。

撮影が軌道に乗ってきた大正十年、栗島すみ子が数え年十九歳で「虞美人草」という作品でデビューしました。当時も今もめずらしい中国劇を織り込んだもので、虞美人と妻愛子の二役で純情可憐な容姿が大きな話題を呼び、蒲田といえば栗島、すみ子といえば蒲田といわれ、蒲田映画の代名詞となり、栗島すみ子時代を作り、後に監督の池田義信と結婚、当時の池上町久が原六四一番地に「池上御殿」と称される豪華な家を建てました。現在の久が原五丁目になります。

初期の蒲田は、女優中心の作品が主で「不如帰」、「乳姉妹」等、涙をさそう新派悲劇ものが多く作られていましたが、一方、時代劇は日活の尾上松之助に対抗して、天活から沢村四郎五郎一派を引き抜き、客の好みに合わせた活動写真的旧劇も制作されました。ロケ地は池上本門寺や鶴見総持寺などでしたが、撮影所内に吉良邸のセットを作り、雪が降るのを待って「忠臣蔵」

蒲田撮影所の正門

討ち入りシーンを撮影したというエピソードもありました。

大正十二年九月一日、関東大震災は撮影所施設を全て焼き払い、所員は一時京都に逃れました。同年十二月、復興なった蒲田に新しく完成したのが、ダークステージです。その後の撮影所のシンボル的存在になりました。当時では、めずらしく電気の照明設備を備え、夜間でも撮影ができるようになりました。

復帰直後に島津監督は「父」主演、正邦宏、水谷八重子で、新派調の明快で近代的な後年蒲田調と呼ばれる家庭正喜劇を発表し、さらに続いて「日曜日」主演、正邦宏、柳さく子では、サラリーマンの侘しさ可笑しさに日常茶飯の事件を加味して、新鮮な作風を完成し、この種の面白さ、悲しさ、可笑しさが以後長い間蒲田のお家芸となりました。

一四年七月、田中絹代が京都下加茂撮影所から蒲田に移ってきました。下加茂撮影所に入社が決まり、野村芳亭所長の所へ挨拶に行ったところ、「なんだ、子供じゃないか」と言われた話は有名です。当時まだ十四歳でした。昭和二年、五所平之助監督の「恥ずかしい夢」の下町芸者役で主演女優に抜擢され、出世街道を歩みはじめました。自ら選ぶ代表作に同監督の「恥ずかしい夢」「伊豆の踊り子」島津保次郎監督の「浪花女」「西鶴一代女」を挙げています。

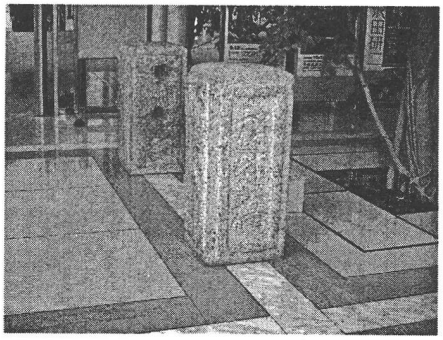
田中絹代の生涯は、そのまま日本の映画史につながると言われています。田中絹代も栗島すみ子に対抗し、「蒲田御殿」を作ると言っていましたが、蒲田撮影所の移転とともに、夢は大船移転後に、鎌倉旭ヶ丘に、「絹代御殿」が実現しました。

しかし、十六年の間、数々の名作を世に送り出してきた蒲田撮影所も、昭和六年頃からトーキー時代を迎え、蒲田でわが国最初の本格的トーキー作品である「マダムと女房」など続々と制作されるようになりましたが、事業も次第に拡大されて、蒲田の敷地では手狭になり、残念ながら大船にある三万坪の土地に移る事になりました。昭和十一年一月に引越しを完了、遂に蒲田撮影所の名前は、消え去ることとなりました。

## 二組の松竹橋

ダークステージが撮影所を象徴する建物なら、蒲田の町と撮影所を結ぶ存在が松竹橋で、当時撮影所の正門前には逆川という六郷用水路の支流が流れていました。此処に架かる小さな橋、「松竹橋」が一般庶民にとって、憧れの夢世界、異次元への入り口でありました。

撮影所移転後もしばらくの間は残っていましたが、やがて川は埋め立てられ、「松竹橋」と刻まれた親柱の行方も分からなくなってしまいました。それが突然、発見されたのです。建設中の大田区民ホール「アプリコ」の完成を十ケ月後に控えていた時でした。発見されたその親柱は、現在「アプリコ」の中、民間のビル「アロマスクエアー」と行き来する扉の横に設置されています。



アプリコ内の松竹橋

外庭にある松竹橋

もう一組の「松竹橋」はアロマスクエアーの外庭、正面入口右側の植込みの中に当時の橋を再現して設置されています。形も素材もほとんど同じですが、こちらはレプリカです。松竹が大船移転五十周年を記念して、昭和六十年に封切られた映画「キネマの天地」に使われ、地元の人たちが松竹に頼んで譲り受けました。

アプリコの内と外、この二組の「松竹橋」が、撮影所の歴史を大切にしたいという、地元の人たちの熱い思いを象徴しています。

（取材　柏村、佐藤委員）

## 新生の町

西蒲田八丁目町会　峯岸　冨壽

我が町会は、ＪＲ蒲田駅の南口に位置しています。かつては、アパートの多い街として通勤する人達で、とても賑やかな町でした。現在は、マンションと商業地域として、遠くからの来客もあり活気に溢れております。

我が町会には、多彩な業種があります。その中で、誇りある色々な活躍ぶりについて、若干、紹介したいと思います。

大田区内でも唯一、学校が二校ある町会です。まずは、御園中学校についてですが、その御園中学校出身者のリチャード勝エレジーノさんを紹介致します。現在、米国に在住するヴィオラ奏者です。ロスアンジェルス交響楽団の一員として活躍する一方、区立の小・中学校でも毎年演奏活動を行っています。また、隣の東京実業高等学校に目を向ければ、有名なマーチングバンド部があります。バトントワリング全国大会で、最優秀賞であるグランプリや金賞を数多く受賞しています。

次に、地雷探査システムを開発した町工場の㈱ジオ・サーチがあります。人道目的で結成された地雷除去支援の会の中心的な存在です。今、地球上には一億個を超える地雷が敷設されたまま放置されています。国連の調べでは、女性や子供を中心に二万八千人以上の死者が出ているとのことです。この優れた探知機は、地面に置いただけで地雷を撤去できるそうです。地雷を撤去することで、今後の国際的貢献が期待されています。

町会には、女性消火隊員がいます。十月に行われるミニポンプ操法審査会に出場するために、日々、訓練に励んでいます。その日頃の努力に感謝し、今後の活躍に期待しています。また、本年も防災訓練を行ないます。町会の皆様もお誘い合わせの上、是非、ご参加くださいますようお願い致します。

最後に、町会役員一同は、町会発展のため与えられた諸行事を会員皆様の協力を得ながら解決して参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

## 事務局からのお知らせ

蒲田西特別出張所の二階に新しく「大田区まちづくり・商業活性化等支援プロジェクト」編集室が開設されました。『まちづくりは人づくり、自分が変わればまちも変わる、だからみんなが主役』のキャッチフレーズのもと、まちを活性化するためのホームページを作成しています。商店街や地域の活動紹介、まちや人の紹介をすることで、みんなでまちづくりをして行く「きっかけ」になれば・・・そんな願いを込めたホームページです。

http://www.ota-machi-katsu.net/
ＴＥＬ　五七一三―〇〇一五
ＦＡＸ　五七一三―〇六〇七

### 蒲田西特別出張所管内

| | | |
|---|---|---|
| 人口 | 男 | 29，557人 |
| | 女 | 27，334人 |
| | 計 | 56，891人 |
| 世帯 | | 29，034世帯 |

平成１５年８月１日現在

## 編集後記

第八号で掲載した特集「多摩川、四季折々」の中で、記事の一部に間違いがありました。お詫びして訂正いたします。なお、訂正箇所は次のとおりです。

三ページの「トミンタワーって？」一～二行目中「旭化成研究所」は「昭和電工」の誤りでした。

第八号を発行して、すぐに読者から記事の間違いについての電話がありました。ありがとうございました。これからも情報紙について、ご意見等がございましたら事務局までお知らせください。

事務局からのお知らせでご紹介した「大田区まちづくり・商業活性化等支援プロジェクト」編集室に興味のある方は、出張所の二階ですので、是非、覗いてみてください。スタッフの皆さんも気さくな方です。

**情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。**

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五